男女平等政策を積極的に進めているスウェーデン。スウェーデンの子どもの本を多数翻訳されている菱木晃子さんは、日ごろ、どんなことを感じているのだろう。

子どもの本からスウェーデン社会がみえてくる

菱木　晃子

スウェーデンの子どもの本を訳していていつも感じるのは、登場人物が子どもも大人もしっかりと描けているということである。子どもの本なのだから、子どもがしっかり描けているのは当たり前なのだが、子どもを取り巻く周囲の大人たちもまた、しっかりと描かれているのである。そうした大人たちの多くは良くも悪くも個性的で、ときには人間としての弱さをさらけだし、あるいは自分らしさを主張し、試行錯誤しながらも一個人としての人生を貫こうとする。登場人物がだれであれ、この世の中を形成する個々の人間の在り様が過不足なく描かれてこそ、作品にはリアリティが伴う。「スウェーデンの子どもの本は、大人が読んでも面白い」と言われる所以は、この辺りにあると思う。

登場する大人に父親が多いのも、スウェーデンの子どもの本の特徴と言えるだろう。日々の暮らしにおいてそれだけ自然に、父親が子育てに参加していることの表れと読みとれる。実際、子どもが寝る前の読み聞かせは、父親の日課だという家庭も少なくない。

もちろん、離婚、再婚、同棲婚が多いスウェーデンでは、実の両親がそろっていない家庭も珍しくない。このような状況もまた、子どもの本にストレートに反映される。たとえば、『パパはジョニーっていうんだ』という絵本。理由あって離婚したパパとママ。主人公のティムはママと別の町で暮らす。今日はパパがティムに会いにくる日。久しぶりに父と息子が二人で過ごす一日が、ティムの視点で淡々と語られる。そこには、たとえ離れて暮らしていても、つねに通い合う親子の愛情と信頼感が満ちあふれている。

スウェーデン社会の根底には、子どもの人格を尊重し、その子にとっての最善を見出そうという考え方があり、児童福祉や法制度はもとより、家庭生活にも深く浸透している。未来を担う次世代を育むには、確立された個を持った大人が、男女を問わず、真剣に取り組まなければならない。子どもの本を通してスウェーデン社会を垣間見ることにより、私たちが得られるヒントは実に様々である。

【菱木晃子（ひしきあきらこ）さん・プロフィール】

翻訳家。1960年生まれ。慶應義塾大学卒業。
現在、スウェーデンを中心に児童書の翻訳、紹介に携わる。訳書多数。横浜在住。

■スウェーデンの現代児童文学に……
●『シロクマたちのダンス』偕成社●『冬の入江』徳間書店●『ノーラ、12歳の秋』小峰書店
■絵本に……
●『パパはジョニーっていうんだ』ＢＬ出版●『ちいさくなったパパ』小峰書店 など。

information

「男女共同参画推進プランひがしおおさか21」の平成16年度進捗状況報告書を作成しました。
ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。

ホームページアドレス
http://www.city.higashiosaka.osaka.jp/060/060030/sintyoku16.html

東大阪市男女共同参画社会をめざす情報紙HOW24号

編集発行：東大阪市 人権文化部 男女共同参画課
〒577-8521　東大阪市荒本北50番地の４　TEL 06-4309-3300
Eメール：danjokyodo@city.higashiosaka.osaka.jp

制作：(株)オフィス・オルタナティブ
デザイン・レイアウト：森田 興子